



「守られるべきもの」

「失われるべくもないもの」は何か

本田 和子

*

「聖域なき構造改革」という言葉が巷を駆け抜ける。従来、不可侵の聖域とみなされて改革のメスが入れられなかった、もしくは、入れようともされなかった領域が、「改革」という視野のなかに浮上してきたのである。

周知のように、大学教育もそのターゲットの一つとされて、マスコミ等を賑わしている。当然のことながら、幼稚園保育も例外ではあり得まい。考えて見れば、数年



前から話題とされ、教育要領の改訂をも促した問題、たとえば、少子化対策の一環としての「子育て支援」の保育内への取り込みは、伝統的な幼稚園保育に対する構造改革的提言に他ならなかった。それは、「幼稚園保育の対象は、三歳から就学前の満五歳まで、保育時間はおおよそ四時間を原則とする」という、伝統的幼稚園保育を根底から揺すぶって、新しい社会的要請に応えよと迫ったのだから。

しかし、それらに対して、幼稚園界の対応は鋭敏とは言い難かった。というより、それらを「幼稚園経営面の少子化対策」、すなわち、少子化によって園児数が減少し、経営困難に陥った幼稚園の救済策程度に見て、むしろ、「幼稚園保育の邪道」と忌避する傾向すらなかったとは言えまい。結果として、それら要請からの「防衛」をこそ良識とし、「幼稚園保育の王道」を守るために、延長保育や預かり保育に手を染めるくらいなら、というより「手を汚す」くらいなら、わが幼稚園は閉鎖しても悔いなどという勇ましい意見すら耳にすることも稀ではなかった。自分の園は志望者も多く父母の要望もない。したがって、子育て支援などという世の潮流に流されず、ひたすら「よい保育」のみを追求したいなどという超然とした見解が、半ば公然と口にされたのもこの動きと無縁ではないだろう。

このとき、わが国の「幼稚園」は、というよりそれは学校教育全般の問題かも知れ



ないのだが、固定観念と固定理論に支配された少なからず硬直化した制度であり、そのゆえに時代や社会の動きから隔絶されて、閉じられた囲いのなかにあることを自ら証明してしまったのではなかったか。なぜなら「よい保育」の名の下に、それまでの体制下で「良し」とされた制度・組織・内容を守ることのみ熱心であって、新しい要請に対して、それが何を意味し、求められているものが何であるかを考えようともしなかったのだから。

*

現在の菌止めのかからない「少子化傾向」と、それに伴う将来的な人口減をどう考えるかという問題は、私たちにとってより真剣な論議の対象とされるべき問題であろう。単に、「少子化阻止」の政策だけが先行して、その対策にのみ性急である現状には肯定し難いものがあることも確かである。わが国の今後の経済政策や産業動向を見通し、長期的な展望を明確化した上で、未来人口を予測することが必要であろうし、それに基づいて、現行の「少子化対策」に異を唱えることがあってもよい。たとえば、未来のわが国は、出生率低下および人口減少という現状を引き受け、少数人口社会として活路を見いだすべきだとする見解もそれなりに妥当性を持つだろうからであ



る。ただし、その際には、どのような社会が構想され、そのなかで、私たちは、どのような暮らしを営んでいくことが出来るのかという、将来設計が必要とされるであろう。その場合には、国際レベルでの産業競争に、大量の人的資源を投入することで、何とかそのレースに勝利してきた従来の国策と、それを前提とした国民生活は、根底から問い直されざるを得ないからである。

前記のように、行政当局の「少子化対策」に対する根拠のある異議申し立ての上で、幼稚園への諸種の要請にも異を唱え、あえて時流無視を表明するとしたら、それはそれなりに信念ある行為として肯定されてもよい。しかし、単に、従来の保育観やこれまで踏襲されてきた保育慣習と異なるからという理由で、それから目を背けそれを退けるとしたら、幼稚園は「いまを生きる親子と、これからを生きる子ども」のための施設ではあり得ないのではないか。私たちは、いま、保育施設が、それぞれの時代に生み出され、「それぞれの時代の子どもと親」を支える施設であったことを想起すべきであろう。その営みが、仮に「教育」に比重のかけられたものであるにせよ、あるいは「福祉」を主眼としたものであったにしても、いずれも、「子どもと親」を支えるという目的は同じである。もし、現行の制度・組織・内容、とりわけ「教育と福祉の分離・峻別」が、これからの子どもと親にとって相応しくないものに変わりつ



つあるとすれば、それは、当然のことながら「改革の対象」とされてしかるべきと思われる。

ただし、この際に怠るべくもないのは、改革されねばならない制度・組織・内容に対して、「守るべきもの」、というより「失われるべくもないもの」を確認するという行為である。それは、言うまでもなく、「いと小さき者の声」に耳を傾けること、そして、「すべての」子どもと親にとって、彼らがよりよく生き成長するための援助を怠らず、その必要を満たすということ以外にはないのか。

ここで「すべての」のいう冠詞を強調するのは、幼稚園保育の場合、時として「子ども」という対象が「わが園児」に限られ、いま、幼稚園に入っていない、あるいは入園を許されていない、様々な子どもたちが視界から除外されることが少なくないからである。「よい保育を守る」ことが主張され、「保育の本質」が云々される場合、それは、「すべての子ども」を視野に入れたものであるべきではないか。「入れない子どもにも香れや 梅の花」という倉橋惣三の一句が、改めて想起される昨今である。

(お茶の水女子大学)